西多摩医師会報

第60号　昭和52年9月

朝　靄　　川合玉堂

目　　次

気管支喘息 …… 森下淳夫 …… 2

参議院選挙をかえりみて …… 西村邦康 …… 6

新中国見て歩き（第12回） …… 加藤　出 …… 9

オーストラリア，ニュージーランドの旅
高水武夫 …… 11

都医師会学校医会学術講演に参加して
福島大寿 …… 13

公衆衛生部よりお知らせ …… 松原貞一 …… 15

理事会報告 …… 今川　武 …… 17

医師会日誌 …… 17

気管支喘息

阿伎留病院　森　下　淳　夫

※気管支喘息の定義

気管支喘息の定義は一般に"発作性の呼吸困難を主徴とし、多くの場合喘鳴を伴い、又この呼吸困難は気道過敏状態による気管支の可逆的な攣縮、浮腫および分泌亢進によっておこり、自然にあるいは治療により軽減しうるもの"とされているが、この定義はあくまでも症状からのものであり、現在気管支喘息の病因が単一と考えがたいことから、気管支喘息をひとつの疾患単位でなく、症候群ととらえる考え方も出てきている。

本来は心血管系の疾患（心臓喘息等），広範な気管支感染（慢性気管支炎等）および肺の破壊的疾患（肺気腫等）は除外して考えなければならないが現実的には難しく、合併していることも多いため、一般医家の中にはこれ等を含んで気管支喘息と呼んでいる場合がある。

※気管支喘息の分類

気管支喘息の分類には外因型(Extrinsic)と内因型(Intrinsic)の二つに大きく分ける分け方とアトピー型(Atopic type)，感染型（Infections type），および混合型(Mixed type）に分け、これに心因型を加える場合がある。

10才以下で発病する場合はアトピー型が、40才以後では感染型が多い。

外因性とは、外的な原因が明らかな場合で、アレルギーの関与によって発症するものが主としてこれに含まれ、内因性とは外的な原因が不明なもので、精神々経的な要因が疑われたり、気道内感染などの内的な原因によるのであろうと考えられる場合である。したがって前者の外因性はアトピー型に、後者の内因性は感染型および心因型とほぼ同一と考えられる。混合型はアトピー型と感染型の混合したものであり、現在は後者の三つの分類が多いようである。

※喘息の成因

喘息の成因についてはいくつかの説がある。たとえば、1）アレルギー説，2)感染説，3）自律神経失調説，4）精神身体的要因説，5)内分泌系異常説，6）β受容体遮断説などがある。このように多くの説があるということは気管支喘息の発症を単一の要因で説明することは困難であることを示している。これ等の多くの説のうちで現在アレルギーの因子が最も広く認められているが、他のいくつかの要因が加わって（あるいはひきがねとなって）発症するのであろうと考えるのが妥当である。

※喘息発作の発生機序

この気道の収縮は過敏性をもった気管支に、外界の種々の刺激が加わって生ずるが、その刺激は(1)特異的なアレルゲンによる刺激，(2)非特異的な諸刺激の２つに分類できる。

(1)　特異的刺激

アレルゲンを吸入すると気道粘膜より吸収され、気道粘膜中にあるマスト細胞表面に固着しているIgE抗体と結合する。アレルゲンとIgE抗体との結合はヒスタミンやSRS−Aなどの気管攣縮作用等のある化学伝達物質(Chemical Mediator)の遊離を起こす。ヒスタミンはマスト細胞内の顆粒中に貯蔵されており、マスト細胞の破壊により血中に遊離し、SRS−Aは新たに生成されて遊離する。この一連の反応はEsteraseの活性化を介し、βアドレナージック受容体刺激による細胞内Cyclic AMP増加は遊離を抑制し、アセチルコリン受容体を介するCyclic CMP増加はその遊離を促進する。

このように喘息発作発現の免疫学的関与はIgE抗体を介する即時型（クームスのⅠ型）反応として考えられていたが、最近はその他にIgG抗体を介するアルサス型（クームスのⅢ型）反応，感作リンパ球を介する遅延型（クームスのⅣ型）反応による喘息もあることが指摘されている。

(2)　非特異的刺激

冷気，刺激ガス，粉塵などを吸入すると、これ等の物質は気道の上部に分布する肺迷走神経の末端であるIrritant受容体を刺激し、迷走神経反射路を介して末端よりアセチルコリンが遊離して、気道の収縮がおこる。（アセチルコリン受容体の遮断剤であるアトロピンは、この反射性気道収縮を抑制する。）ヒスタミンもこのIrritant受容体を刺激し、アレルゲン吸入による気道収縮もアトロピンで部分的に抑制されることは、即時型アレ

ルギー反応による喘息発作も一部反射性気道収縮を介することを示している。

感冒、気道感染にひきつづいて喘息発作が誘発されることはしばしば経験されることである。この機序は明らかでないが、感染による気管支粘膜の変化、それによる気管支粘膜のIrritant受容体の感作、また細菌自体が抗原として働くことなどが考えられる。運動によっても喘息発作が誘発されることがある。特に深呼気時に誘発されやすく、イソプロテレノールがこれを予防することから、気管支筋の収縮によることが推定される。

※気道の過敏性

しかし先に述べた特異的，非特異的刺激のみで喘息発作が誘発されるものではなく、喘息発作が誘発されるためには、喘息患者特有の気道の過敏性（素因）が必要である。例えばアレルギー性鼻炎の患者は、ブタクサなどの多くのアレルゲンに対して高いIgE抗体値を持つことはあるが、それのみでは喘息発作は誘発されないし、また通常の人は冷気，刺激ガス，粉塵などを吸入しても喘息発作は起こらない。

喘息での気道過敏の原因は不明であり、1)ムスカリン性アセチルコリン受容体の過敏(Vagotonia説)，2) 気道のIrritant受容体の過敏(Vdotonia説)，3) β－アドレナジック受容体の遮断（β－Adorenagic blockade説）があるが、ここでは詳しくは述べない。

※診　断

1）問　診

これは重要であり表1の手順で行うとよい。できればこれより詳細な問診表を印刷しておき、チェックするだけにしておくとよい。

例えば表1の1. 職歴により職業性喘息（コンニャク喘息，マブシ喘息，ソバ喘息等）の判明に役立ち、表1の5. 発作の起こりやすい月により花粉の種類や真菌の種類の見当がつけられる。

2）理学的所見（臨床所見）

気管支喘息の臨床所見は定義によって特徴づけられているとおりで、その他努力性呼吸、起座呼吸、呼気の延長、補助呼吸筋の動員が認められる。乾性ラ音が全肺野に呼気，吸気ともに聴取されるが、特に、気管の攣縮のため呼気にpfeifenが著明となり、粘調な痰の出現によりGiemenが聴取される。又喘息発作の初期には発汗が著明であるが、発作が長びいてくると発汗が少なくなる。このことは発汗等の不感蒸泄により脱水となったためであり、粘調な痰をより粘調とし喀出しにくくするために呼吸困難が増強する。従ってこのために充分な補液が必要となるのである。

また喘息発作は夜半より明け方にかけて起こることが多く、来院時には全くラ音の聴取出来ないこともあるが、このような場合大きく息を吸わせておき、一気に早くはかせるような負荷をかけるとラ音を聴取出来ることがある。なお重篤な発作の際には逆にラ音が聴取出来なくなることがあるが、この時は注意を要する。

3）検査所見

（喀痰）粘調性に富み、好酸球多くCharcot Leyden 結晶やCurschmann螺旋体をみることがある。（剖検例では気管支粘液栓時に気管支の鋳型状の喀痰を認める。）

（体温）通常は上昇せず、上昇のある時は感染の合併を考える。

（胸部レ線）発作中には肺の過膨脹を示す。従って長年発作を繰り返している場合は肺気腫を合併していることが多い。

（心電図）肺性Pがみられることがある。

（血液像）好酸球増加が特徴である。

（赤沈）感染の合併なければ普通は正常。

（肺機能）発作のない時は正常であるが、発作の際には①スパイログラフィー（FEV 1.0，FEV 1.0% MMF）の低下、②気道抵抗，呼吸抵抗の上昇、③フローボリウムカーブの平低下等の閉塞性換気障害を示す。

（動脈血）PCO_2は喘息発作が軽い場合には、やゝ低下傾向にあり、重篤になると上昇する。PO_2は低下しSaO_2は軽症では正常であるが重篤となると低下する。PHはほぼ正常範囲内であるが、重篤となると低下する。

（血清IgE）アトピー型では高値を示すことが多い。

（IgE抗体）特異的な抗原に対するIgE抗体が、半定量的ではあるが試験管内で測定されるようになり〔RAST（Radioallergosorbent Test)〕現在ではこれがP－K反応（Prausnitz-Küstner反応）に代わって用いられるようにな

った。

（気道の過敏性）アセチルコリンやヒスタミン，メサコリン等のChemical Mediator の吸入試験に喘息患者はきわめて過敏である。

※アレルゲンの検索

以上のことより気管支喘息が疑われまたは判明したら出来得る限り、アレルゲンの検索を行うべきである。喘息誘発因子の検索の重要性は、喘息のタイプ推定のみならず減感作療法をはじめとする治療法の選択や、誘因除去により発作の回避に必要だからである。アレルゲンの推定にはやはり問診が基本となる。

1）皮膚反応

問診により疑わしいものを含め、可能な限り多種のアレルゲンエキスを用いて皮膚反応を行う。一般にスクラッチ法と皮内法があるが、我々は最初にスクラッチ法を行うが、これは操作が簡単であり、また一度に多種の反応が試みられるからである。これにより陽性と出たものに対して皮内反応を兼ねて閾値テストを行う。これは陽性アレルゲンについて対象液を用いて倍数稀釈し皮膚反応系列をつくると、ある濃度以下で陰性となる。反応が陽性を呈する最大稀釈数を陽性限界閾値とし、この閾値を参考にして吸入誘発試験及び減感作開始濃度を決定するが、これら皮膚反応の2～4日はステロイド，抗ヒスタミン剤等が中止されている状態でなければならない。

2）吸入誘発試験

皮膚反応で陽性アレルゲンとなったものを低濃度より吸入せしめ、スパイログラフィー，呼吸抵抗，気道抵抗，フローボリウムカーブで判定し、対照時に比して変化があればこのアレルゲンがその患者の喘息発作の原因と考えてほぼ間違いはない。（実際にはこの試験は施行しないで減感作療法を行う場合もある。）

※特異的減感作療法

減感作療法は陽性限界閾値の10^{-1}倍の濃度より表2のような方法で週1回の割合で皮下注射を行い、0.5mlとなったところで濃度を10倍にあげて最初より行う。そして原則は100倍の0.5mlを又はその量で皮内反応を行い発赤が40×40㎜を維持量とし、維持量となってより3～6ケ月を目安に最初は週1回、次は隔週その後は月に1回の割合で注射してゆくが、これはあくまで原則であり、一般的には維持量の抗原量が多いほど臨床効果が大である傾向にあるのでそのように努力する必要がある。また発作あるいは都合により4週間以上注射間隔が出来た場合には、前と同量注射し、6週以上では前回の半分またはそれ以下、8週間以上の場合には最初よりやりなおすのがよいと思われる。

※非特異的変調療法

今回これは表3に列挙するだけにとどめるが、減感作療法と併用する場合もある。(我々はDSCGを使用する場合が多い。)

表1　問診のチェックポイント

1. 職　歴
   扱う粉塵，ガス，薬品，繊維など
2. 居住歴
3. 発病時状況
   年令，時期，場所，誘因など
4. 現在の主訴と発作時症状
5. 発作の起こりやすい月（季節），時間，場所
6. 誘因と考えられる事柄
   気候（寒冒，晴雨，低気圧，日光など）
   吸入抗原（カビ，掃除，臭気など）花粉
   食餌抗原（牛乳，卵，魚など）
   接触抗原（化粧品，衣服，塗料，植物など）
   薬品（吸入，内服，塗布，注射，座薬……）
   感染（蓄膿症，感冒，鼻炎など）
   身体因子（過労，過食，月経，妊娠など）
   精神因子（ストレス……）
7. 常用薬
8. ペット
9. タバコ，酒
10. 来院まで受けた治療と効果判定
    対症療法，減感作療法，ステロイド，インタールなど
11. 家族歴，既往歴
    アレルギー素因，アレルギー疾患を中心に（アトピー性皮膚炎，アレルギー性鼻炎，アレルギー性結膜炎等）

表2　注　射　の　実　際

注射回数	注射量	注射量	注射回数	注射量	注射量
初回	0.05mℓ 又	は 0.05mℓ	7	0.3 mℓ 又	は 0.35mℓ
2	0.05 〃	0.1 〃	8	0.3 〃	0.4 〃
3	0.1 〃	0.15 〃	9	0.4 〃	0.45 〃
4	0.1 〃	0.2 〃	10	0.4 〃	0.5 〃
5	0.2 〃	0.25 〃	11	0.5 〃	
6	0.2 〃	0.3 〃	12	0.5 〃	

※　0.5mℓの次は濃度を10倍にあげて初回にもどる。

※　初回濃度は陽性限界閾値の10^{-1}倍とする。

表3　気管支喘息の非特異的変調療法

1. 金　療　法	抗体産生抑制？　細網内皮系刺激による防御力亢進？ 下垂体副腎機能賦活作用？
2. ヒスタグロビン療法	ヒスタミン固定能の応用，抗ヒスタミン抗体産生？
3. ワクチン療法 バスバート ブロンカスマベルナ 精製痘苗 アラーバス	細胞性免疫の低下？　細菌吸入抗原に対する特異的減感作療法的意義？
4. アストレメジン療法	肺のVagotoniaを他臓器（皮膚）に移して気管支の過敏性を調整しようというもの
5. 心　理　療　法	自律訓練法，催眠療法など各種心理療法によって心因除去と心因刺激による反応性の低下
6. γ－グロブリン療法	血清療法，γ－グロブリンの抗アレルギー作用，抗菌作用 ヒスタミン固定能応用
7. DSCG（インタール） （Disodium Chromoglycate）	抗原抗体反応がおきたとき肥満細胞からの脱顆粒を阻止し Chemical Medatorの遊離を抑制
8. そ　の　他	異種蛋白療法，温泉療法，MSアンチジエン，針灸療法， 抗マラリア剤（クロロキン剤），頸動脈球切除術，その他

参議院選挙をかえりみて

選挙対策委副委員長　西　村　邦　康

朝礼を終え、此れから診察だと机に向かった。とたん、先生電話です　と事務から云われ受話器をとった所、「先生おめでとう。福島さん、当確だよ」と小林市会議員の声が聞こえてきた。10時頃には当確だと聞いてはいたが、余り早いので一瞬イキをのみ、続いて田村都議事務所からも「おめでとう」を云われ「ウン／……」と実感がわき、それから多くの方々から電話を戴き、よかった、やった!!　「そうか――」となんともいえない気持ちだった。

その夜は、雨の降るなかを夜遅くまで西多摩中の街角にポスター立て、を手伝ってくれた近所の友人と車座になって、話に花を咲かせた。

いま、この参議院選挙を振りかえってみると様々な事が思い出されますが、「なんともシンドイ事であった。」の一言につきるような気がします。

この「なんともシンドイ事」の中で考えた事、感じた事を二・三のべてみます。

1》政治意識（国営論と我々）

今回の選挙の意義は、大きく流動する時流の中で、我々の行っている医療を、どのように位置づけ、又発展させるかにある、と云っても過言ではないと思います。

そして、その焦点として、医療国営化・救急医療義務化がクローズアップされたように、その本質は、医療の社会化を、社会主義の方向で位置づけるのか。或は、自由主義的な医療の社会化の中で、医療を位置づけるかの撰択にあったと云えます。どんな頑固な資本主義者でも医療の社会化は時の流れとして認容しなければならないのが現実です。

そこで我々医師は、今回の参議院選挙で自由主義的な医療の社会化の優位性を国民の前に広く訴え、コンセンサスも得る必要がありました。しかし、この国民に広く訴えると云う意味では、我々は充分な活動を行ったとは云い難いと考えます。なぜなら、医療国営論・救急医療義務化は、我々の危機感をあおり、運動のバネとなり大量得票のエネルギーとなった事は事実ですが、その内容は単なるエモーショナルな反応のレベルだけに終わってしまった事もいなめない事実ですから。

この事は上部組織の理論的指導の不明確さ、によるものと考えますが如何でしょうか？　このアイマイさは末端の選挙対策委の席上でも《国営化反対と我々が云っても、患者は国営のほうが良いと思っているかもしれない。国営化反対などと云わないで、「とにかく頼む」と云ったほうが良い。と云った意見に強く現われていました。この心理の中には、国民の利益と、医師の利益とを、よく整合する国営化反対論の中の医師の利益に心情的によりかかった、うしろめたさがあった為と考えます。

ところで、医療の社会化　を考えるにあたり有力な理論として、元国立公衆衛生院々長曽田長宗氏の説があります。氏はその医療の社会化の歴史的発展段階として、次のように規定しています。

即ち、第1段階；医療の普及、第2段階；医療の公営あるいは非私営化、第3段階；医療費負担の社会化、第4段階；医療業務の社会的組織化、第5段階；医療施設または制度の民主化　です。

貧困と疾病が背中あわせであった、戦前・戦後のある時代においては、誠に見事な理論であると云えます。

戦後30年　国民の90％が中流意識を持ち、豊かな社会を形成している現在、この理論をもう一度検証してみる必要があります。即ち、この理論にてらし、現在の医療制度の現況はどうかと云いますと、現実に第1段階の医療の普及は達成され、第2段階の医療の公営、或は非私営化は、とびこして、第3段階の医療費の社会化は、国民皆保険、老人医療費の無料化、高額医療費補助　とほぼ完全に実施されており、癌センター、医療センター、最近では循環器センターなどが整備され、又保険請求事務のコンピューター化による請求事務の一本化が実施された事を考えますと、第4段階の医療業務の社会的組織化が着々と進行しつつあると

考えられます。第5段階の医療の施設または制度の運営の民主化は、最近、我々の最大の関心事であった救急医療義務化請願と云った、ラジカルな型で問題が提起されて来たと解釈してよいと考えます。

この現状分析で非常に重要な事は、国民が望んだ、医療の社会化、は実質的に達成、或は成熟しつゝあると云う事で、しかも医療の社会化には不可欠の要件として位置づけられていた、医療の公営或は非私営化が実施されなくてでも、と云う事です。

換言すれば、医療国営は、医療の社会化の前提でもなく、又目的ですらなく、貧困が疾病と背中あわせであった、貧しい時代の、社会化への道の一つの有力な手段であったと云う事です。ところで現在、ジャーナリズムが医の荒廃・退廃を執拗に追求し、国民も混迷を漠然と考えている事の本質は、医療の持つ側面である営利性にあると考えます。この営利性は単に医療だけでなく、世間の全ての業務に云える事ですし、問題のポイントはモラルの問題であると云えます。

このように考えますと、医療の公正が目的で、手段ではない医療の社会化は、正義は社会主義の専売特許のように宣伝する社会主義路線で補完するよりも、柔軟な対応の出来る、自由の基盤の基で、その成熟を期待するのは自明の事です。

情報・資料の豊かな日医・都医の優秀な指導者が、この問題をより一層精緻に論理的に組み、一つの理論として我々の前に提示してくれたならばと思う。そうすれば前述の国営論を回避するような消極的な支持の依頼はさけられ、積極的な行動がとられた事と思います。

たしかに日医・都医の指導部も、国営論を最大の争点として我々の前に提示し、我々にアピールし、勝利の原動力とした事は事実です。しかし、この最大の争点も新自由クラブのTシャツ戦法にみられた今回の参議院選挙の特徴であったムード選挙の波におしながされ、国営化反対＝安恒某個人に勝利する、ものとして矮小化されてしまったきらいがあります。

私は今回の選挙は社会的人間である医師として自由社会（自由陣営ではない。）に於ける、明日の医療を模索する実践の場として、とらえるべきだと考え、又そうする事が教条的な国営化路線を打破する道であると考えていました。

この考えは85億円の年間予算の中で僅か300万の財政支出で、曲りなりにも4万有余の福生市民の休日診療体系がフォローされている。そしてこ体系の企画運営は福生医師会が非常な努力をしている事を市民に話せば、多くの市民の共感を得て医療・福祉の問題は専門家にと答えが返って来た事でも正しかったと思っています。

このようにみてきますと、今回の参議院選挙で日医・都医の指導は、若干指導力に欠ける所があったように見ています。

この事では選挙公示一週間前の都医政連の連絡会で渡辺会長がその挨拶の中で、保革逆転の危機のみを強調され、明日の医療のため、我々のため、医師会代表を国政の場に送ると云う事を一言も言及されなかった事に、聞いていて大きな不満をもった記憶があります。

参議院選挙に勝利した原因は、多くの人が云っているように会員の国営化反対のエモーショナルな反応のエネルギーのみであった、と云ってもよいと思います。

選挙とは所詮そんなものかもしれませんが、それでは若干淋しい感じもします。

何はともあれ"勝った"のですから、そんな愚痴っぽいことは此のぐらいにして、実際的な事柄で感じた事を述べてみますと、

1〕ポスター等選挙用書類の配布

これらの選挙用ポスター・パンフレット類は余り早い時期に各医療機関に機械的に配布しないような仕組にして、公示前3ケ月位まで医師会にプールしておくようにする。大切なポスターを無駄にすると云う事ばかりではなく、必要な時に数がたりなく効果的な事が出来ないと云う事の方が問題です。

2〕ポスターの掲示

限られた大事なポスター類ですから会員の照れくささを、捨てていただいて、効果的な場所に極力掲示する。

3〕後援会加入名簿を重視する。

前回の丸茂先生の選挙の時は、私自身もそんなものは必要でなく、兎に角、やりさえすれば良いのではないかと考えていましたが、今回、戦の渦中に巻き込まれてみて終盤戦に入ると、いかにこの名簿が大切であるかを思い知らされました。選

挙法で運動はTelだけでしか、その方法が無いのですから、これは有力な財産です。因に当医師会の後援会加入者数は約3,400名で、得票数は御存知の通り2,613票です。勿論加入してくれたから全て票をくれるとは限りません。又未加入者の人の投票も多くある事も、まさにその通りだと思いますが「分どまり」の良い事は事実です。

当医師会内に128ある医療機関の中で名簿の未提出機関は57で、44％は未提出であった。

上記の事を考え、この数字が小さくなる事を希望します。

3〕後援会加入者に挨拶状を出す事

都医政連では金がかかりすぎるので、これは出さないとの事でしたが、前述した通り、大切な財産ですから、人情の上からも挨拶すべきだ、と云う意見が多かった。都医政連が出さない方針なら各支部医政連がその責任で出すようにすべきでしょう。

4〕宣伝カー巡回の際の集合

宣伝カー巡回の際、最寄りの先生方は激励のため、声を掛けて欲しい。士気の昂揚と連帯感を非常にたかめます。

5〕1人の集票力

今回、日の出地区では川崎先生が1人で98票を獲得されました。大した事だと思います。我々も先生なみにやれば、西多摩で13,000はとれるのですから、……

6〕他機関との関係

支援団体との連携は今回は、歯科医師会を訪問したのみで、とりたてて行わなかった。我々の運動ももう少し組織的に動き連携を密にすべきであった。ただし百瀬先生のお兄さんの団体には、大変お世話になりました。

7〕上部団体との関係

候補者もさることながら(これは全く大変な事)日医・都医の先生方も積極的に末端に来て、我々会員の士気を鼓舞して欲しい。日医は弓倉先生が2回、都医は1回も我々の所へは来ていただけなかった。

此れは邪推かも知れませんが、都医も松永先生一人にばかり、おんぶしないで、もっと組織的な活動、(例えば各支部で獲得した他支部の後援会名簿を公開し、当該支部に連絡し、運動の相乗効果をねらう、と云うような)をして欲しい。

以上、のべた此等の事項は全く瑣末な事で、選挙のイロハで、今更と笑われる事ばかりですが、このような一番初歩的な事柄も充分マスターしないで、猶かつ高得票を得たのですから、我々の力は大したものとも云えます。この初歩的な事柄をより習熟すれば、もっと力が発揮出来るかもしれません。

最後に埼玉県は、前回丸茂先生のときは27,516票、今回は227,378票とその差22万票、この大量得票は、福島先生個人の努力と、人徳のしからしむる所と考えますが、それでも埼玉県医師会員の苦労と負担は、並々ならぬものだったと思います。

この苦労と負担を思うと、日本医師会も日医連の代表として、候補者を選び推すのならば、ある特定の地域の会員に過度の負担を掛けるような事はさけ、全国医師会員が、平均的な努力をすることによって当選するような、システムを作って戴きたい、と考えます。が此れは愚者のタワゴトでしょうか？

そして又、日本医事新報8月6日号に武見日医会長が、『参議院選挙あれこれ』と題し、日医連の委員長として私は長い間、自由政治体制を党の方針とする自民党支持のために、及ばずながら応援を続けて来た。…(中略)…選挙と云うと飯より好きだという医師会員がいないでもない、そして無意識のうちに自民党の集票人化している事を、私はにがにがしく思っている。云々……』と書いていますが、これは、"ちょっといいすぎ"ではないかと思います。このおもいも愚者のツブヤキでしょうか？

とにかく、皆さん私もふくめて大変御苦労さまでした。　　(32回敗戦記念日に)

新中国見て歩き（第12回）

東青梅病院　加　藤　　出

昭和51.6.6（日）続

南京179師団の生産工場見学の後、実弾射撃のため、師団の演習場へ向った。といっても師団のすぐ隣にある広い演習場で、昔新宿大久保にあった様なコンクリートの長いドーム（300米あった）の射撃場ではなく、野っ原をそのまゝ用い、山に向って射つだけで、はずれの方に赤旗で危険を示しているに過ぎないことは、民兵の射場と変らない。待っていた兵士達は、若い少年兵達という感じであったが、先ず射撃に先立ち、銃剣術の訓練を見せられた。なかなか元気横溢、気合の入った訓練であった。この様な銃剣術はどこの軍隊でも行っているのか、どうかわからぬが、昔の日本のものと少し審判法が異るらしいのと、日本流に言えばやゝヘッピリ腰の様であった。防具の面も日本のものに比べ、やゝ簡単な様であった。次で射撃演習に入り、小銃・重機・自動小銃・軽機・40粍バズーカ砲・75粍無反動砲・82粍迫撃砲・軽重機同時射撃など、夫々色々な方法の射撃を見たが、精度はなかなか良く、小銃では10名中、40点満点9名、38点1名という程であった。射撃は100米から200米で距離は比較的短いが、訓練には変化を持たせ、駈歩前進射撃など、一生懸命やっている様子は、誠に真面目で気持のよいものであった。標的も色々工夫し、射撃の手応えなどが体得出来る仕組になっている。命中による地雷の爆煙は100米も天に沖し壮観であった。兵士の服装は、木綿服に弾帯、ズック靴で、鉄帽ヘルメットなどはない。吾々見学団は100米程後方に見学席があり、6倍の双眼鏡を2人に1つの割に貸してくれた。昨日見学した民兵の射撃に比べれば、更に実戦的で且、命中精度も更に良いようで、極めて訓練精到というところだろうと感じた。単なるパレードで、予行演習をやったとしても、命中精度はそんなに急に良くなるものでもないだろうから、これが実力と思ってもよいのではないか。何れにしても、吾々10名のためにこの様な射撃展示をしてくれた点は驚きに値する。資本主義的考えで計算すれば、弾薬・人件費その他で数百万円に達するだろう。費用効果からすれば、吾々如き国全体に対する影響力の少ない者にこれだけ費用を投じても意味はないのにと思い乍ら、しかし、大いに感謝しつゝ午後4時頃、張参謀長と再会を約して、別れを告げた。

炎天下、六月初旬とは言え暑い演習場を後にして、車は紫金山を前方に見て走り、小高い山の間、森の間を進み、ある寺院風の所へ止った。ここは霊谷塔という、緑の木々の間にある九層のコンクリート造の塔で、中は上層まで上ることが出来るらしく、折柄日曜日のこととて多くの若い市民達が散歩していた。この塔は比較的古いもので、1926年までは木造であったという。境内入口には2階建の休憩所もあり市民の憩の場としても良い場所であろう。塔の故事来歴も聞いたが、残念乍らメモをとらず忘れてしまった。次いで休憩所の2階に集まり、すぐ隣にある中山陵に詣るべく、説明を受けた。中山陵は言うまでもなく、故孫文（孫中山）先生の歿後、1926年着工、1929年完成した陵墓で、山の中腹の広い地域（8万m^2）に、広い参道が700m、階段は392段あり、祭殿は海抜158mに位置するという。日本の神社の様な荘厳というのではなく、青瓦の屋根に白壁、金文字彫で統一された、落着いたなかに荘麗・雄大なたたずまいであった。孫文先生は1866年広東省中山県生れ、香港の西洋医学校を卒業し、清朝末期1894年に革命の旗を挙げた民衆革命家で、1905年夏、東京で革命勢力の結集を謀り、1911年の辛亥革命によって封建制度は終りを告げ、中華民国を成立させ、大總統となったが、その地位を袁世凱に譲った為に失敗し、紆余曲折のあと1925年、癌に侵され、北京で死去された。生前からの希望で南京に陵を建立した。堂塔には扁額にあたる部に「天下為公」（天下は公衆の為のもの）という金文字があり、中の石碑には「中国国民黨葬、總裁孫先生於此」との金文字が彫られてあった。奥の堂には民族・民生・民権の三民主義の文字があり、孫文先生の掲げたスローガンがすぐわかる様にしてある。更にその中には壁面一杯に石面に彫刻して、当時作られた憲法が全文示されてあった。しかしこの点だけは一部彫刻の文字をセメントで埋めてあり、現在の体制に合わない点を消してあるらしかった。更にそ

の奥の部屋は径5米程の回廊となり、その下の中心深くに遺体をそのまゝ埋葬してあるという。参拝を終って戻りかけると、陵は山の中腹にあるので、その眺望は誠によく、広い平野が一望のもとに見渡すことが出来た。そのたたずまいは静寂というべく、工場団地もなければ、飛行場も見られなかった。392段の階段を降りると、その正面には孫文先生の銅像が立ち、遙かかなたを望んでいる様であった。ところで現在の中国での孫文の評価は、封建制度を倒した点は高く評価しながら、結局はブルジョア革命分子と考え、通訳氏も私は嫌いだと明言し、高い所までの参拝はやめてしまっていた。それでも憲法の字句が、一部消してあるだけで自由に参拝出来るわけだし、これが昔の日本ならば、体制が異れば根こそぎ破壊してしまうかも知れず、やはり中国人の方がスケールが大きいのかも知れないと感じたことだった。

昭51.6.7(月)

本日は朝からシトシト雨が降り、やゝ蒸し暑く扇子が便利に思える季節であった。午前中は石油動力省に附属する南京市動力車学校を見学した。1955年創立、現在は全員寄宿制で、電気設備、熱エネルギー、電気計器類を主として専攻している。プロ文革後、ここも学生募集を試験でなく実践ある工場労働者、農民より入れる。修学期間は4年制のものを2年半とした。6割を学理、4割は工・農・軍事を学ぶ。実地と遊離した学問でなく、労農工と一致し、プロレタリヤに奉仕することを教育の方針としている。そのため工場へも派遣し、学校にも附属工場あり、更に短期訓練班を編成して校外の工場にも指導に出る。また労・技・幹の三結合をはかり、教師の 1/3 は古参労働者であるという。革命委員氏の案内で校内を見学したがレンガ造りの立派な建物の工場や教室、教材など私の粗末な知識から考えると、日本での中等工業程度の教育水準の学校かと思った。しかしキャンパスはなかなか広いたたずまいで、郊外にあるためか、静かな環境と緑の樹木の多いことは、吾々日本の都会の学校では考えにくいことなので美しい環境と思った。

学校辞去後車は沼沢の様な、河の様な所を通り、日本の観光地的感覚の所に止った。ここは南京の北部の玄武湖という、宗時代に作られた観光地又は公園という。しかし日本の公園とはその大きさが全く異なり、極めて大きいが、景観もまたやゝ大まかな点は否定出来ない。古来文人墨客が遊び幾多の詩歌で有名な地だが、月曜日午前中で、雨がポツポツという天候のためか、行き交う人も稀であった。多分週末には家族連れで賑うことであろう。

午後は中興原絹織物工場を見学、ここは街中にあり、比較的狭い土地に一杯の古い建物を有する工場で、附近の人々も数台の車で乗りつけた吾々を見て、誰が来るのか、何事ならんというケゲンな面持ちで遠巻きに見ていた。いかにも個人の中小企業という感じであった。ここの責任者は革命委員とは招介されず、工場負責人と紹介された。その意味はわからないが、工人は900名、織機250台、22種の緞子(ドレス)を製造し、一部は輸出している。従業員は作業員が93%、事務デザイン7%、女子は70%という。給料は大部分40元(6,400円)、3交代の8時間制という。即ち24時間フル稼動ということになる。現在は高速度ボイラーを作り、ジェット式絹捺染機など新式のものとし、解放前に比し製品1万倍、質的には99%の合格率になったが、企業管理レベルは未だ低いとのことであった。しかし工場を見るとパンチカード式で模様を作り、光電管式連続往復制御方式もとっているという。製品はオール絹だという話であったが工場内では化学繊維の表示のある糸もあったから一部には用いているのであろう。工場内では巾広の製品をわざわざ切断し、これを上手につなげる実演もして、殆どわからない位になることを示してくれたりした。しかし狭いところに機械が数多く配置されており、工場内の騒音のひどさは予想以上で、これでは耳が悪くなる率が高いと思ったが、この点では何ら対策は考えていないらしく、吾々医師グループの所感として、耳栓などの採用をすゝめておいた。製品はなかなかきれいであったが、これらの織物を衣類として用いることは現在の中国々内では考えられないことなので、その質素さに賛成すべきか、残念と言ってよいのか一寸複雑な心境であった。しかし、私個人としてはやはり女性がきれいな緞子を中国服として着用してもらいたいと思ったことだった。又吾々はこの様な製品を、この工場では売ってはくれず、外人専用の百貨店で買わなければならないらしい。

工場の見学を終って宿舎へ帰り、荷物をまとめ、南京駅へ向い、17:40発の烈車で最終旅行地である上海に向うことになった。　　(つづく)

「オーストラリア」「ニュージーランド」の旅

高　水　武　夫

年に1～2回は日本脱出したくなり、今年も7人の家族旅行で食事も見物も皆相談してきめ、おいしいもの食べあるきの気儘な旅であった。

昭和52年4月28日午后8時30分「カンタス航空」にて羽田空港を飛び立ち一路「シドニー」へ直行す。「ボーイング707機」内は毎年経験しておる他の外国空路のものと比べて一般に質素で特に旅客機につきものの若い「美人スチュワーデス」の姿はなく、中年の日本女性の他は何れも実直そうな大男の「スチュワード」達が活潑に「サービス」しているのに驚く。機内で夕食をすませ、ウトウト寝てしまって、眼がさめたら外は真っ赤な太陽が地平線を離れる処で下界は見渡す限りの緑の原野が果てしなく広がり、「オーストラリア」だとわかった。人家が見えはじめたと思ったら、もう「シドニー」で飛行時間9時間30分、「ひとねむり」の旅であった。4月29日 午前7時5分「シドニー国際空港Kings Ford-Smith Airport」に到着、タクシーをひろって市内の「Menzies-Hotel」に落ちつく。所要時間20分、料金4$。親子三人部屋に落ちつき入浴して旅の汗を流し、床に入り疲れをとる。

午后はSKの中田君の案内でオーストラリア・スクウェアタワー地上47階の「レストラン」で昼食をなす。「円筒形ビル」の廻転レストランで食事しながらシドニー全市を眺められ8ミリで全市を撮影することが出来た。47階の「廻転レストラン」より眺めるシドニー港の全景は「パノラマ」の如く筆紙につくしがたいものであった。食後、婦人達の最大の目的の店世界で一流の高級毛皮店「コーネリウス・ファーズ」に数時間をすごす。こんな時位男性は「手持ちぶさた」で「あくび」の連続で自分の身体をもてあますのに困ることはないと思う。その上否応なしに懐から$が放出させられてしまうのだから男性は「お人よし」だと思った。数時間で漸く開放されたと思ったら、次は有名な「オパール店」にお伴して「ブラックオパール」のあれこれと選ぶのを待つ。「オパール」は「メキシコ」に次いで世界的のものとの話など昨年「メキシコ」の旅の時もとめたので必要でないと考えておったが、やはり女性にとっては宝石には目がないようなり。世の男性よ要心 ～ のこ

と。可愛らしい「コアラ」の「縫いぐるみ」が大小色々とあったので暇つぶしにもとめる。

シドニーの何処の店へ行っても店員が日本製の電子計算器を器用に使っているのが目を惹いた。外国の人は一般に暗算が不得手で、以前には「いち」「いち」鉛筆と紙で計算していた。日本人の暗算力は外国にも有名で、この点日本人の評価を高めているとのことである。

「オーストラリア」の都市では営業時間が定められていて平日は午前9時から午后5時半迄、土曜日は午前9時から正午迄、日曜日は勿論休み。又週に1日「ショッピングデー」があり、午前9時から午后9時迄となっていて大賑わいという。但しその日はシドニーとキャンベラでは木曜日、メルボルンでは金曜日となっている。ヨーロッパ各国の様に午后1時から4時迄の昼寝の時間がないのは旅行者にとっては都合がよかった。「ガイド」より聞いた話にてオーストラリアへの旅行者のためのせる。

夜はシドニーに来て誰もが必ず一度はよる「雄大なエビ」の料理と「かき」の店「Blue-Enzel」に行く。一寸薄暗いが静かな落ちついた「みせ」にて殆ど日本人客が占め、「尺餘のエビ」の半身は「さしみ」に半身は「ボイル」して出してくれ、又「生かき」数十個円形に揃えて出してくれた。その美味なること経験したものでないとわからぬ位だ。シドニーに行ったら必ず味わうことをおすすめする。

漸く明日からは「キャンベラ」シドニー市内観光、つづいてニュージーランドの旅となるがその旅行記を紹介する前に総括的に「オーストラリア」について「ガイド」よりの受売りですが紹介する。

日本とオーストラリアとは北と南の半球に相対峙して四季の気候も従って正反対で、丁度「オーストラリア」は晩秋で肌寒い気候だった。でも、幸い時差は1時間で時間的感覚は日本とあまり変わらず助かる。日本の21倍の国土があり人口は僅かに1,300万、殆ど東京都位の「人口」で70％が都市に集中している状況にて、狭小の地域に過密の人口を抱えておる日本人にとっては実にうらやましい限りである。「オーストラリア」は豊富な天然資源に恵まれても工業化進まず。処が全く資源に乏しく、殆ど外国より資材を輸入して全国民全力をあげて工業生産で世界に雄飛している日本と好対照と思われた。

オーストラリアの住民は大体がイギリス系で96％を占め、残りは中国系・イタリア系・ギリシャ系と種々雑多である。人口の70％が都市に集中していて、日本のように主要都市の間の地域に小さな町や村と云うものは殆どない。一面に見渡す限りの「グリーンベルト」が都市の内外に広がっている。ゴルフ場や色々の野外スポーツ場が至る処に恰も自然に存在しているように見えた。オーストラリアの人々は男女とも体格偉大であるが、日本やアメリカの様に肥満型はあまり見受けられない。広い天地と豊富な食糧と朗らかな楽天的気分と、更に野外スポーツの発達等の故であろう。然し結婚するならオーストラリアの女性と結婚すると失望するとの事なり。恋愛時代は何処の国でも同じように熱烈であるが家庭に入ってしまうと、がらりと変わり、女性は何もやらなくなるとの事にて炊事・洗濯・育児何でも男性との事、うなずける事は外出中の夫婦は奥さんはのんびり一人で歩いて居るが、主人は赤ちゃんをおんぶしたり荷物をもったりして居るのを旅行先でよくみうける。どうしたんだろうあの夫婦と首をかしげたが、話を聞いてうなずけた。オーストラリアの女性と結婚して別れる日本人が多いと聞くが、うべなるかなか。

オーストラリアは六州と二特別区とからなり、それぞれの州都には「キャンベラ」「シドニー」「ブリスベン」「メルボルン」「ホバート」「パース」で、最も古い大陸と云われるだけにめずらしい動植物に富んで居る。動物には「コアラ」「カンガルー」「カモノハシ」等の有袋類、鳥類には「オーム」「インコ」「ペリカン」「エミュー」「極楽鳥」等、「ユーカリ」「アカシア」「ハイビスカス」「ブルメリア」「ブーゲンビリア」「ジャランダ」「ポインセチア」等の植物、それにオーストラリアの誇る二大天然記念物に「世界最大の珊瑚礁グレートバリアリーフ」と世界最大の一枚岩「エアーズロック」がある。「エアーズロック」は長さ3.2㎞、巾2.4㎞、高さ330m、周囲9㎞という壮大な一個の赤色の砂岩で大陸中央部の大平原の中心にあって、あまりにも世界中に有名なり、オーストラリアを訪れる旅行者は誰でもが足をむける処なりと。

オーストラリアと日本との関係は近年益々密接

な発展を示しており、世界の生産量の30％を占めるという羊毛の輸出量の略々50％が日本に出され、世界第三位の小麦粉も日本向けが多く、世界に誇る食肉もその多くが日本向けで、昭和50年は日本の購入が手控えられたためオーストラリアに不景気を斉したとの話であったとガイドが語ってくれた。ちなみに「シドニー」の街で特上の牛肉の値段をのぞいてみたら1Kg約700円（オーストラリア$で2$少し）と標示してあるのに驚く。こんな安い牛肉が日本人の「口」に入るとき、どうしてあんな高値になるのか何としてもうなずけない。政治の仕組みがいけないのだろうと考えた。我々庶民は、あんなに安く輸入出来るのだから「マット」「マット」安い牛肉が手に入ってよいのにと考えた。

無尽蔵の鉱物資源に対しては同様で日本の一流商社の出張所が至る所にある。日本からの輸入は「自動車」「カラーテレビ」「トランジスターラジオ」「時計」「カメラ」その他色々の家庭用品が多く、外国製品と位置を変えつつあるのが現況との話である。

以上のような情勢が反映してか、「オーストラリア」の大学では従来は外国語科は仏独語のみであったが、最近は日本語科がこれに代って盛んになってきているとの事である。「ガイド」の奥さんに聞いたまゝのオーストラリアの大略を報告し次は順次旅行記を書きます。

東京都医師会学校医会学術講演に参加して

学校医部　福　島　大　寿

日時　昭和52年7月15日
場所　日仏会館ホール

演題
(1) 学校保健の課題について
文部省体育局長　柳川覚治
(3) 児童・生徒の集団検尿について
日本大学医学部小児科教授
北川照男

臨床診断から始まり、臨床経過とその事後措置つまり腎臓病管理についてであった。糖尿は省略し腎炎関係について報告します。

小児の腎炎は経過が非常に良好で、3才児では3カ月以内に100％、2カ月以内に80％、1カ月以内に60％が治癒するが、年長児（10才）では慢性化の傾向をとることがある。

児童・生徒の集団検尿では起立性蛋白尿、遊走腎などの無害な蛋白尿、血尿を除外するためには、早朝第一尿を採尿するが、大事なことは、就寝直前に排尿させてから就床させることである。尿蛋白(−)　460倍検鏡で赤血救1～2コは正常とし、尿蛋白(±)以上、400倍検鏡で赤血球数コ以上を異常として再検する。特に赤血球10コ以上は全く異常である。尚、起立性蛋白尿を除外するためには、体幹後屈腎圧迫姿勢を10分間保ち、尿蛋白が増加する場合は起立性蛋白尿とする。

北川教授が過去3年間経験した集団検尿陽性者176例のうち、正常、起立性蛋白尿、遊走腎などの診断例は約25％、糸球体腎炎と診断されたもの、血尿を認めたが最終的な診断が保留され、なお経過観察中のものの合計が約70％、その他の泌尿器科的疾患（尿路結石、特発性血尿）であった。

腎炎と診断されたもの、あるいは血尿を認めたが腎炎の診断を保留されたものの約$\frac{1}{3}$％は3年間で尿所見が消え、悪化したものは10％以下であった。小児の場合は慢性経過をたどると診断されても予後は必ずしも悪いものばかりではなかった。

異常を認められた児童・生徒の管理は次の指導表を参考にして下さい。

腎臓病管理指導表

医療面からの区分	区分	学校生活規制の面からの区分	教室での学習	教科体育（休み時間もこれは準ずる） 軽度	中等度	高度	給食	クラブ活動及び部活動 軽度	高度	特別教育活動
1 要医療	A	登校禁止	禁	禁	禁	禁	禁	禁	禁	Ⅰ児童生徒活動 学級委員など ＡＢＣ禁止 Ⅱ遠足・見学 ＡＢ禁止 Ｃ バスで行くことのみ可 登山長距離の徒歩 禁止 Ｄ 競歩・登山禁止 Ｅ すべて可 Ⅲ林間学校，修学旅行 ＡＢ禁止 Ｃ 参加 但し長距離歩行登山禁止 Ｄ 長距離登山のみ禁止 Ｅ すべて可 Ⅳ臨海学校 ＡＢＣ禁止 Ｄ 条件付参加 Ｅ すべてに参加 Ⅴ朝礼，清掃，その他 ＡＢ禁止 ＣＤＥ朝礼，清掃可
	B	要制限	可	一部可	禁		禁	一部可	禁	禁
2 要観察	C	要養護	可	可	一部可		禁	可	可	禁
	D	要注意	可	可	可	一	部可	可	可	一部可
3 普通生活	E	普通生活	可	可	可		可	可	可	可

部位運動（上肢）（徒手体操）
ぶらんこ・すべり台
ボール投
鬼あそび
鉄棒
マット運動（低学年）
行進
バレーボール（小・中学校）

部位運動（下肢）（徒手体操）
かけ足・フォークダンス
すもう（小学生）
跳箱・ハンドボール
ドッチボール
サッカー（ゴールキーパー）
野球（バッテリーを除く）
テニス（低学年）
卓球 バトミントン
水泳（水あそび程度）

全身運動（走 跳）
縄飛び・サッ カー
鉄棒（高学年 ）短距離走
マラソン・持 久走など
野球のバッテ リー
バスケットボ ール
ボートボール ・ラグビー
スケート・テ ニス（高学年）
すもう（中学 校以上）
柔道・剣道・ スキー
水泳（競泳）

ほとんどすべての文化的活動

ほとんどすべてのスポーツ的活動

管理区分についての目安	A	B	C	D	E
	在宅医療または入院治療の必要なもの	1）急性腎炎回復期 2）ネフローゼの寛解状態にあるもの（投薬中） 3）慢性腎炎で登校可能なるも腎機能低下あるもの血尿と蛋白尿が（＋＋）以上あるもの	1）急性腎炎に残るもの 2）ネフロー 寛解にある 3）慢性に軽 と蛋白尿が 尿または血	で血尿のみわずか ゼで投薬中止して もの 過する腎炎で血尿 （＋）程度，蛋白 尿が（＋＋）程度	1）急性腎炎が治癒し尿所見（－）観察中のもの 2）ネフローゼ（投薬中止後長く寛解にあるもの） 3）血尿のみ，蛋白尿のみが軽度にみられ運動により尿所見が少し変動するもの	集団検尿で血尿または蛋白尿のみがわずかにみられるもので運動しても尿所見の変動が少ないもの

公衆衛生部よりお知らせ

松　原　貞　一

1. 風疹予防接種用の問診票

妊娠初期に風疹に罹患すると先天性異常児を分娩する危険が高いということで、本年5月より指定保健所による成人女子を対象とした風疹の予防接種が行われているが、今回 10月より実施主体市町村の定期の予防接種として、中学3年の女子を対象として接種が行われることになった。11月に入ると流感の接種が始まるので、接種間隔の問題より都の指導として9月中旬より10月にかけて行われるのが望ましいとされているが、原則として有料（約1,600円程度）であるべき接種料をどうするか（都と市町村の補助という形で無料となる可能性もある）、 都の出産届によると中学3年生の時妊娠したと思われる分娩が毎年5～6件あるということで、それなら中学生に対して妊娠の有無を聞くべきか否か等々未だ明らかになっていない問題が多々あるにもかゝわらず、9月の補正予算で通れば10月より実施の運びになると伝えられている。風疹に罹患したことが確実であれば、更に予防接種をすることは勿論ないわけである。しかし流行中においてさえ3％前後の臨床診断による誤診率がはっきりしている以上、対象児が確実に風疹にかゝったか否かを判断するには最終的には抗体の測定以外には方法がないわけであり、後で妊娠を前にして不安となり抗体を測るようなことが起こる位なら、測定をしていて抗体値が8倍以上ということがはっきりしている者以外は、全員接種を行った方がよいのではないかと考えている。たとえ風疹にかかったことがあり抗体値が8倍以上の者に更に接種したとしても、大した副作用はないとされ、更に抗体値の上昇が得られるので本人のためにも悪い結果にはならないとすれば、自分の市町村の子供たちから100％風疹による異常児分娩をなくそうとするためには、これより外に方法がないように思われる。しかし都の指導としては、昭和50年以後の流行時臨床的でも風疹の診断をうけたことがある者は対象より除外しようということであり、これでは100％防止と迄は行かないが、行政としての効果を否定することも出来ない。全員抗体検査・陰性例のみ接種というのが医学的には正しいやり方ではあるが、政治的に予算もないとすれば我々としてはこんな所で妥協するより仕方がない。

なお現在妊娠しているかどうかの問診は何万分の1かの確率であるかも知れないが、あることには間違いないので、本当なら問診して事故を起こさないようにすべきであるが、事が教育の場という問題でもあり今回の問診票には入れないことにしたので、実施に当たっては養護の先生とよく話し合って行って頂きたい。従って差し当たって西多摩地区の問診票のヒナ型は次の様に致したいと思っていますので、市町村の係に御指導を頂きたい次第です。

（問診票ヒナ型は16ページに掲載）

2. 五日市保健所長の更迭

五日市保健所では、8月1日付で所長の更迭がありました。

新所長は、中村伸蔵先生　で大正八年生まれの57才。慶応義塾大学医学部のご出身です。

都関係のお仕事は、都立衛生研究所細菌部に長く勤務され、都立府中病院内科部長を経て五日市保健所長として着任されました。

因に、前所長の　前田　寛先生は衛生局主幹として本庁に籍はありますが、10月から新設される福生保健所の所長となられる予定です。

現在は、福生保健所開設準備室主幹として、青梅保健所に居られます。

問　診　票

受ける人の名前		昭和　年　月　日生 満　才	保護者氏名	㊞
住　所	番地　　方 荘			電話

	質　問	こたえ		
1	昨日と今日の体温は	昨夜　度　分・今朝　度　分		
2	1カ月以内に本人や家族の者がはしか，風疹，水ぼうそう，おたふくにかかったことがありますか	ない	ある	だれですか（　　） 何の病気（　　） 発病した日　　月　　日
3	1カ月以内になにか予防接種をうけましたか	うけない	うけた	何の予防接種ですか（　　） うけた日　　月　　日
4	いままでにひきつけをおこしたことがありますか	ない	ある	最後のひきつけは　　月　　日 その時熱は　　あった　　なかった 脳波は　　正常　　異常　　しらべない
5	いままで予防接種後何か副作用がありましたか	ない	ある	何の予防接種ですか（　　） どのような副作用ですか（　　） （例）熱　発疹　けいれんなど
6	いままでに心臓病，肝臓病，腎臓病など重い病気になったことがありますか	ない	ある	病名（　　） 発病年月　　年　　月
7	兄弟姉妹の中で予防接種による副作用がありましたか	ない	ある	だれが（　　） どんな（　　）
8	現在具合のわるい所がありますか又最近お医者さんにかかったことがありますか	ない	ある	どのように悪いか具体的に（　　） （例）鼻みず　せき　下痢など いつからですか　　月　　日 病名がわかっていれば（　　）
9	昭和50年以後の流行で風疹にかかったことがありますか	ない	ある	い　つ

予診医師名		判　定	年　月　日
			接種　可　不可

理事会報告（52.7.27）

報告事項

1. 会長協議会報告　（山田）
　① 第11回医療経済実態調査の実施について
　② 毎月勤労統計特別調査の協力方について
　③ その他 ── 医政連 ── 福島先生参議員当選各地区得票について
1. 公衆衛生部報告　（松原）
　集団災害時医療救護活動について自治体との協定書締結について
1. 税務対策委員会報告　（百瀬）
1. 多摩医学会報告　（西村）
　高水先生が多摩医学会々長に選任さる。
1. 公衆衛生部報告　（松原）
　流行病の調査について定点をおいてまとめて情報を提供する。

協議事項

1. 会務についての提案　（中林）
　色々議論もあり問題点もあるので更ににつめた形のうえ検討して再提出する。
1. 適正配置について　（西村）
　固定委員は正・副会長及び各ブロック会長に決定す。あとはその都度適宜任名する。名称規約については委員にお願いする。
1. 管外理事会について　（今川）
1. 新入会員紹介　承認

以上　（今川記）

医師会日誌

会員数　212名　A会員　131名
　　B会員　81名

退会々員
　氏名　和田雅子
　勤務先　青梅市立総合病院

会議
　8月7日　役員協議会
　9日　福祉部会
　10日　会報委員会
　20・21日　管外理事会
　23日　定款委員会

講演会・その他
　8月7日　整備会
　10日　法律相談
　16日　ゴルフコンペ
　21日　囲碁大会
　25日　学術映画会
　30日　学術講演会

会員通知
　○国保被保険者証の更新について
　○52年度農薬危害防止運動の実施について
　○多摩医学会演題募集
　○西多摩医師会互助会々則
　○9月がん制圧ポスター
　○会報
　○学術映画会案内
　○学術講演会案内

毎毎ご世話になります。(あのいく
たり)お会報に掲載さらば幸甚
七月末日　清水岸田北一
牽牛織女會天津細雨燈明樂吉辰
四十二年前既更夜蓋溝橋畔起征塵

昭和52年9月1日発行
発行所　西多摩医師会
東京都青梅市西分3−103
TEL (0428) 23−2171（代）
会報編集委員　大河原周　平林信隆
松原貞一　堤次雄
吉野住雄　鈴木修
土田守一　波田野洋夫
今川武

今日も、あの町で、この街で。

太陽神戸はお客さま
1人1人とのおつきあいの
深さを大切にします

のマークでおなじみの〈太陽神戸〉。全国330余の店舗では、それぞれの街に密着してビジネス活動や暮らしの設計にお役に立つ銀行サービスをお届けしています。どうぞ「うちの銀行」としてお気軽にご利用ください。
〈太陽神戸〉はきめの細かいお手伝いで、お客さま1人1人と末長いおつきあいをさせていただきたいと願っております。

太陽神戸銀行
青梅支店

Cardioprotective Trasacor®
…ストレスから心臓を保護します。

トラサコールは、β-受容体遮断作用のほかに、やや穏やかな膜安定化作用と本剤固有の内因性交感神経様作用(Intrinsic Sympathomimetic Activity : ISA)を有する不整脈・狭心症治療剤で、過剰な交感神経系の刺激から心臓を保護します。

新発売

不整脈・狭心症治療剤
トラサコール®
錠20mg・40mg CIBA

特集　終戦前後

地獄の追憶 (2)

藤田フヂエ

4. 咸興収容所

此の間、毎日のように誰彼と呼び出し日本人へのリンチが始まった。そして九月十八日いよいよ日本送還と云うことで、皆喜び勇んだ。地下から掘り出した衣類で私達女は旅仕度をした。下着類、モンペ、背中にかけるだけの小さな布団と云う物を夜を徹して縫えるだけ縫った。食糧は全員手分けして持った。乗車命令が伝達された。所が私共の住んで居た、本町官舎の住民が駅に出るのに必ず通らねばならない遊園地まで来ると驚いた。手に手に長い棒切れを持った暴徒の群れが凡そ二十人位で日本人の男の人を、なぐりつけて居るのであった。血まみれになって悲痛な叫び声を上げ地面をころび廻ってるそのそばを私達は早く早くと子供を急がせて走った。走りながら私は後ろを振り向き主人にも早く早くと叫んだ。やっとの思いで皆の集まりつゝある貨車の所まで来た。振り返ったが雑踏の中に主人の姿は見つからなかった。私は私達に付き添って来てくれた助役さんに早く行って見てと頼んだ。貨車の中はすでにいっぱいの人で座る場所もない程であった。やっと子供達だけ座らせて私は夫の姿を探した。程経て夫は来たのであったがその顔にはあちこち血がにじんで物すごいのであった。何と云う事か。始めの情報では藤田はリンチされない組に入ってたので安心していたのに血迷った暴徒の群れはもう誰彼の見さかいもつかなくなってしまったのであった。貨車の中は興奮した大人達の叫び声と子供の泣き声、その上無茶苦茶に詰め込まれむし風呂の様であった。嗚呼、然しこれで祖国へ帰れるのだ、早く安全な日本へ帰りたい。夫の傷が気になり私は水筒の水で冷やし続けた。征二郎は暑さの為に寝つかず泣いてばかり居るので私は夜通し眠れなかったのであった。長い時が過ぎて貨車が止まり重い鉄の扉が開けられた。うだった体に冷たい風が一瞬快かった。元山へ着いたのであった。皆暗いホームに下りた。

こゝで機関車の整備でもするのかと思って一息入れて居ると銃をつきつけたソ連兵に又もとの貨車に追い込まれたのである。そして元来た道を咸興まで逆送されたのであった。この事が、これから一年近くの地獄生活の間中の後悔となって恨み骨ずいに達したのであった。即ち元山で停止を命じられた時撃たれてもフルスピードで突破すれば良かったものをと。余りにも策の甘さに憤激したのであった。咸興で全員降され収容所に当てられた鉄道教習所まで長い道程を乞食の様な身なりの大群がぞろぞろと歩いたのである。夜通し貨車の中でうだって眠れず疲れ切った体に背には征二郎を負り両手にもガラクタ荷物を持ち、お鍋やコンロを首からぶらさげて、私はよたよたとその列について歩いた。教習所に着いたのは昼頃であったであろうか全々蔭もないその広場に長時間立たされ九月の陽に照りつけられ、遂には地面に座り込むのであった。夕刻近くになってやっと宿舎の割り当てがあった。私共の宿舎は講堂であった。幾人居たのか数はわからないけど、やっと座れるだけが一人の持場で、一寸外に出て戻って来るともう他人の足が延びてると云う風だったのである。

愈々いつ日本に帰れると云うあてのない避難民生活が始まったのである。こゝで乙守さん一家六人親戚へ行かれ若い者三人も各々働き場所を見つけて別れる事になった。一応咸興以北の日本人がこゝに集結する事になったのであるがその数は覚えてない。当時は全々食糧の配給はなく城津で全部掠奪された揚句なので、ほとんどの人が何も持っていなかったのである。昼間は男の人達は仕事探しにどんどん出て行った。主人もその人達につ

いて行ったのであるが鎌の使い方も知らないで稲刈りなどさせられて怪我ばかりして来るのであった。その頃以前からの知り合いの李さんが私達をたずねてくれてお米や果物さては現金をくれたり度々見舞ってくれたのであった。その方は脱走をすすめてくれたのであるが、どうしても主人は聞き入れなかったのであった。その内宿舎いっぱいに熱病が流行しそれは急速に蔓延して行った。そして毎日十五人も二十人もの死人が出た。何しろ健康な者も病人も体は密着するし汚物の処理等も言外で医薬などとても望めず危険この上なしの状態であった。その頃部屋替えがあって私共は寮の方に移された。そこは畳が敷いてあってこの点良かったのであるが四畳半に三十五人押し込まれたのである。私達は先の李さんに頼んで長女を李さんの知人の家に預ける事にした。先方は気持よく引き受けてくれたので夫は一応娘を預けて来はしたものの言葉も又生活習慣も違う所でどんなにか心細い思いをしてるであろうと思うと私達は夜も眠れないのであった。死ぬならばもう家族一所に居た方が良いと私が云い出して三日目に娘を連れ戻したのであった。それから数日経って、昔、主人がお世話した丁さんから迎えが来て自宅の一間を使ってくれとの事で私は征二郎だけ連れて日が暮れてこっそり宿舎を出た。当時征二郎は栄養失調で、すっかり痩せて夜も昼も泣いてばかり居た。その為に私もすっかり健康を害ていたので丁さんの家の温かいオンドルは何にも勝る保養となったのであった。その上湯殿には一日中お湯が湧いて居て幾度でも入浴して下さいと云ってくれたり、お肉だお魚だと毎日御馳走してくれたのであった。然し終戦から三ケ月秋も終わる頃には私は疲労からか御馳走を目の前にしても全々食慾がなく、それでも温かいオンドルと溢るゝお湯に浸っては眠ることに依り日増しに回復したのであった。征二郎も泣かなくなり笑顔を見せおしゃべりするまでに元気になった。そうした或る日その家の老人が私の部屋に来て低い声で云いにくそうに言った。日本人を匿って居るらしいと近所が騒ぎ出したからと。私はこの家に来て以来そのことが気になって全々窓も開けず庭にも出ず征二郎の声も手で口を被う様にして来たつもりであったが老人の言葉でひやりとしたのである。これまで此の家の人達がせいいっぱい私につくしてくれたことが痛い程心にしみてもうこの人達に迷惑はかけられないと私はその場で決心した。その日暮れるのを待って気の毒がる家人に心からのお礼を云い私は征二郎を負って外に出た。星が冷たく光り冴えきった夜であった。

はるかに収容所の屋並みが黒々と続いている方角へ歩いて居ると私の後を誰か来る足音がした。振り返って見るとあの家の老爺と少年であった。私は真っ暗の中を心細く歩いていた時だったので嬉しくなり、あら来てくれたのと云うと、小さい声でハイと答えた。近所へ気をつかいながら病気の親子を幾日も養生させて尚身の危険も省みず送ってまでくれるこの至れり尽せりの心持を思って私は涙がぬぐいきれなかったのである。静かで物音一つ聞こえず折から遅い月が上って急にあたりが明るくなり高く伸びた道ばたのキビの葉がカサカサ風にゆれ絵の様な夜のしじまであった。私と適当に間を保って歩いている二人の草履の音を聞きながら私は遂先程まで居たあの温かいオンドルと明るい家庭の雰囲気を思い収容所の地獄生活を思い又別の涙が流れるのであった。フト我に返るともう宿舎は目の前であった。この間誰にも出会わずに来れたのは幸いであった。と老爺が云った。奥様こゝで帰ります体に気をつけて下さいと、たどたどしい日本語で言った。そして少年に背負わせていた包みを取って私にくれ早く中に入りなさい早く早くと、私がお礼を云うのに逃げる様に去って行ったのであった。真っ暗な宿舎では寝静まっていた。この収容所も近郷からの日本人で土間にまで溢れる程になり遂に抽籤で第一分団第二分団に分け第二分団は富坪行きと定まったのが十二月二日であった。一粒のお米の配給もなかったのであるがこゝ咸興では差し入れがあったりで私共も何とか凌いで来たのであったが私達が富坪行きと定まって又先の李さんが種々親切な案をすゝめてくれたのであったが、こゝでも夫はがんこに聞き入れなかったのである。一般邦人二千五百鉄道関係五百計三千人の大集団はどんより曇って雪のちらつく中を無蓋車に乗せられたのである。鉄道関係の引率者は城津事務所長の勝又氏と庶務課長の友川氏列車区長の塩溝氏であった。中程に女子供を座らせて男の人達で囲んでくれたのであったが汽車が走り出すと風が巻きこんで雪は、ほゝを打ち冷たい風に子供達はヒイヒイ泣くのであった。

骨のずいまで冷え切って富坪へ着いた時はすでに薄暮で寒さも一入であった。富坪は元日本軍の演習地だったとかでその兵舎が収容所に当てられたのである。所々僅かに村落が見えるだけで一面丘陵地帯のひどいでこぼこ道のぬかるみの中を避難民はまるで蟻の行列の様に延々と続くのであった。盲目の舅は幾度も転ぶので恭子は泣きそうな顔でその手を引いてゆくのであった。私は城津ですでに妊娠していたのでその時は七ケ月にもなっていて衰弱しきっていたのでそのぬかるみにすべったり、ころんだりしながらやっと目ざす宿舎にたどり着いた時は、とっぷり暮れて人の顔も定かに見えない程であった。

5. 富坪収容所（十二月二日）

とり敢ずてんでに建物の中に入り主人達は燃えそうなもの見つけて来て焚火を始めたのである。元気な人は水を探して炊飯を始めてる者も居たが私はもう綿の様に疲れてしまったので征二郎をおろして抱きたく板も満足にない床の上にぐったりとなってしまった。恭子も信一郎も一かたまりになって眠ってしまったのである。体中ずきずき痛んで目が覚めた。ガラスもない破れ窓から冷たい風が吹き込んで、もう夜は明けていた。夫は一晩中私達の足もとで焚火をしつゞけてくれていたのである。昨夜着いた時は暗くてわからなかったが長い兵舎が十棟も立ち並んでいた。羅南連隊の演習地でその仮兵舎だと云うことであるが窓も破れ戸板もろくになく荒れ放題のものであった。建物の中程にあった井戸にはもう長い列が出来て順番待ちを家族で交替しやっと汲み上げた水は黄色く濁った泥水なのであった。それでもやっと手にした水でお米を洗うと云うことは出来ずそのまゝ炊くのであった。手頃の石を集めて窯にし落葉や枯枝を拾って炊くので大人も小供も総動員なのである。朝と夕方宿舎の廻りは炊煙と喧噪で文字通り火事場の騒ぎであった。抽籤で場所割りが定まった。夫は板切れやぼろ布で窓をふさぎ越冬に備えた。私は二三の人達と村へ買い出しに出かけた。ジャガ薯デン粉岩塩凡そ食べられる物は相手の云い値で買えるだけ買った。宿舎は中央が二メートル位の通路でその両側が板張りになって居て私達鉄道関係で一棟五百名収容されたのであった。むしろ一枚分の広さが一世帯と云う程度の割り当てだった。夫と私は筵や藁を買いに行った。所がその家では十二月と云うのに稲こぎの真っ最中で、夫にお前仕事手伝え、と云った。云われるまゝ夫はその家の仕事をすることになり私は征二郎を負って二回三回と手に持てるだけ運んだ。むしろの下にその藁を敷くと子供達はもぐり込んで暖かい暖かいと喜んだ。

その内北鮮特有のどんより曇った寒い寒い日が続いてやがて細かい雪がパラリパラリ降り始めた。降り始めると毎日の様に降り忽ち一面雪に覆われたのである。此の雪は根雪となって翌年四月まで解けないのである。これまでロスケの使役で山から木を切り出したりで僅かでもお金を得ていた人達も結氷に入って仕事もなくなったのである。夫は出かけると二日も三日も戻らない事があって私が心配してるとフラッと戻って来る。それは避難民の外出は禁じられていたので、こっそり二三人で仕事探しに出るのであって、労賃として薯だの雑穀等を貰って来るのであった。その仕事は雪の下の落葉をかき集めるのだと云った事を覚えている。その頃私は過労心労が高じて熱さえ出て息切れがひどくすっかり衰弱してしまっていた。征二郎もこれ又極度に弱って、もう泣く元気もなくなってしまい、水を汲んで来たりお粥を炊いたりしてくれて居た恭子も信一郎も次々に発疹チフスに罹り寝込んでしまったのである。夫はもうどこへも出ず私達の看病をしてくれたのであった。征二郎は十三日の夕刻細い細い指で私の乳房を探りながらアーチャンアーチャンと蚊の泣く様な小さい声で私を呼びつゝ遂に、こと切れたのであった。私はそのまゝ朝まで征二郎を抱いて泣いた。石膏の様に冷たくなって二度と征二郎の体にぬくもりは戻らなかった。大人の起こした戦争の為に何の罪もないこの可憐な子供達が毎日どれだけ死んでしまったことか数えきれなかったのである。子煩悩だった夫も声を上げて泣いた。そしてその遺体を自分で焼いて来ると云って日暮れを待って、ネンネコで負り薪木を持って雪の曠野へ一人で出て行ったのであった。宿舎の中も寝静まった真夜中にやっと夫は戻って来て黙って懐から一にぎりの骨をそっと私の手のひらにのせてくれたのであった。その内に恭子が元気になり、お粥を炊いたり氷にとざされた川のわずかな流れに洗濯に行ったりで十才の子が実によくやってくれたのであるが信一郎の方はひどく腹をこわして全々無表情で口

もきかなくなってしまったのであった。二十日が過ぎても一向に内地帰還の話も出ずその頃から猛烈な勢いで襲った熱病即ち発疹チフス、サイキ熱と云われた病気にほとんど宿舎中が患ったのであった。あちらからもこちらからも呻き声が聞こえ起きて歩いてる人は珍しい位でさながら地獄絵図そのものであった。呻き声が止んで静かになったと思ったらもう冷たくなってしまっていてもその遺体を墓地に運ぶ人もなく死体と枕を並べて寝ている始末だった。そうした中に夫も頭が痛い痛いと云いながら私達の為にお粥を炊いてくれていて遂にたおれてしまったのであった。私はもう生きる気力もなく涙にむせんだ。妊娠していた私に盲目の老父、それに病気上りの青い顔色の二人の子供とを雪の曠野に残して夫は永遠に帰らぬ人となってしまったのである。それは十二月二十八日であった。それ以来朝が来て又夜が来ても私はもう起き上がる気力もなくうつらうつらとして時折人の足音や話し声で覚めると云う様な状態が続いた。恭子も信一郎もその様な私のそばですっかり元気をなくし、庭をあちこちする人の動きを見ているのであった。周囲では正月だ餅だと、どん底生活でありながら騒いでいるのであった。恭子が、母ちゃんお餅売ってるよ、と私の耳に口を寄せて小さい声で云った。これまで遂ぞこの様なこと云った事もないのに私はいじらしくなって、出発の時の為にと残しておいた三合ばかりのモチ米を思い出しそれを炊く様に云った。恭子はニコッとして信ちゃん炊きに行こうと云ってお鍋をかゝえて二人は走って出た。どの位の時が経ったのか顔も手も黒くすゝけた二人に炊けたよ母ちゃん炊けたよと呼び起こされた。ではよくつぶしなさいと私は云った。二人はキャッキャッ云いながらやっていた。疲れきってる私の脳裡に子供達のその声だけが聞こえて、すぐ又今度はどうするのと云う声に少しずつ丸めなさい、と云うとワー出来たよ出来たよと二人は歓声を上げたのであった。家族の中で唯一人病気に罹らず目が見えない為に不自由な収容所の中では余り動かず寝たり起きたりしていたお爺さんも此の幼い孫達が作ったお餅を喜んで食べたのであったがそれから四五日して遂に発疹チフスに罹ったのであった。その頃には収容所の近くにあった分校の様な建物が病棟に当てられてお爺さんはそこへ移される事になったのであった。その朝若い人に背負われてお爺さんは私に、これが別れになるかも知れないがお前は早く元気になって此の子達を日本へ連れて帰っておくれと悲しい言葉を残して行ったのである。その日から毎日その病棟へお粥を炊いて持って行きお爺さんに食べさせる仕事が恭子にふえたのであるがどんなに吹雪く寒い日も一日も欠かさずあの子は続けたのであった。その病棟にお医者さんが来られたと云うことであったが、いつしか子供達と仲良しになった、その若いお医者さんは恭子の頼みで宿舎へ来て私に注射を打って下さったのである。薬も度々恭子が貰って来てくれ私はこれで生きられるのではないかと、わずかながら希望が持てる様になった。或る朝例に依ってお粥をお爺さんの所へ持って行った恭子がすぐ戻って来たので、どうしたのと聞くと、お爺ちゃんはよく眠ってゝ起きないから置いて来たと云うのであった。間もなく友川さんがお爺さんの亡くなった事を知らせに来て下さり、恭子はワァワァ泣きながら遺髪をとりに友川さんについて行ったのであった。私の体は相変わらず一進一退で夜はひどい寝汗をかき全々食欲がなくカマキリの様に痩せて居た。然しお腹の子供は育っていてそうした中で私は三女を産んだ。三月二十八日の夕方であった。

宿舎の中に助産の心得のある人も居て周囲の人々の御好意で初湯もつかわせて貰ったのであった。咄嗟の機転でひろったトタンを折り曲げてタライにしたのだと後に聞かされ私は感激したのであった。その超非常の中にあって赤ん坊の為に友川さんの奥さんが夜に日についで作って下さったであろうと思われる初着と毛糸編の可愛い足袋とを賜物として下さったのであった。私はお産をして翌日から急に目が見えなくなった。初めは余り泣いたのでその為かと思ったが水で冷やして見てもすぐそばに居る恭子達の顔さえ全々見えないのである。すぐ友川さんの奥さんが舎内を歩いて肝油を持ってる人は一粒でもと貰い集めて下さった。私はその情けの固りの様な肝油の一粒一粒を感謝と共にかみしめたのであった。然しお乳が全々出ず恭子がおも湯を作って吸わせたのであったが赤ん坊は夜も昼もヒーヒー泣き通すのであった。その頃外にもお産された方があってお乳の出る方から一日数回貰い乳をしたのであったが夜中等赤ん坊の世話をしながら恭子まで泣き出す始末であった。

その赤ん坊もお腹をすかし通しでヒーヒー泣きつゞけ生れて十日ばかりで死んでしまったのだった。

〃収容所に永病む我れの出ぬ乳を
くくみしまゝに吾子な息断ゆ〃

肝油が効いて来たのか目は少しずつ良くなっていったものゝ身も心も氷にとざされた様な明け暮れであった。然し大自然には春がめぐり来て鉄条網に囲まれた収容所の外にはミドリが芽ぶいているのであった。恭子は大人達に交って草摘みに出かけオオバコ、ナズナ等茹でて私に食べさせてくれた。元気な大人達は墓地の整理に駆り出されていた。冬季は地面が凍結するので遺体の埋葬も思う様に出来なかった様でそれが四月ともなって凍結がゆるみ出すと露出した遺体が野犬に荒されていると云うことだったのである。十畳敷位の大きな穴を掘って大人の間に子供の遺体を並べそれを幾重にも積み重ねて土を盛る。一つ完成すれば又一つと云う風に作るのだと云うことであった。四月も半ばになって墓地も出来上り合同慰霊祭と云うことで全員集合した。私も子供達に支えられる様にして参加した。そこには大きな土まんじゅうが八つも出来て居た。そして松の大きな角材に筆太に日本人の墓としるしてあった。点呼の結果残った者は千四百数人であった。三千人でこの富坪に来てわずか四ケ月余日で千六百人と云う沢山の日本人が無念の涙をのんで此の地に果てたのである。僧侶も居られてお経が始まった。私は墓地には初めて来たので夫達の遺がいがどこに埋葬されているやら知る由もなく、その八つの土盛り全部にお参りした。葬儀がすんで皆宿舎へ引き揚げてしまっても私はそこを去るに去れない気持であった。新しい悲しみに涙は止めどなく流れるのであった。恭子も信一郎も一緒に泣いていたが夕方近くなって風も冷たくなり、やっと宿舎へ帰ったのであった。久し振りの遠歩きにすっかり疲れて宿舎へ戻るとそのまゝ私は眠ってしまった。慰霊祭がすんで以来宿舎の中が日毎に広くなってゆくのであった。それは昼間は元気な人は皆草摘みに出かけるのであったがそのまゝ脱走して行く者が多くなったのである。中には、なけなしの物を身ぐるみ、はがれてひどい目に会い又宿舎に舞い戻った人もあった。が十人か十五人位で一組になって脱走した様であった。私は寝ていてその様な計画をしている人の動きは大体わかったけれどとてもその頃ついて歩く自信がなかったので悲しかったがあきらめていた。唯朝毎にあの人もこの人もと云う様に見慣れた顔が見えなくなる度に云うに云えない心細さはたとえ様もないものであった。でも当時の私の健康状態でとても三十八度線を歩いて越える自信はなく、それに四人もの肉親が此の地にて不慮の死をとげた事を思ってもう日本に帰りたいと云うよりあきらめの気持が強かったのである。あきらめると気持が軽くなり、五月に入って暖かくなるにつれ体の方も日増しに恢復していったのであった。そうした或る日突然、腰に長剣二本ぶらさげた一人の保安隊員がやって来て、オイお前達は日本へ帰してやるから旅費をつくれと、云って出ていった。

それは全く思いがけない事だったので皆びっくりしたのだった。残留組はどの分会にもあった様であるがその何れも長患いで歩行も困難でやっと生きていると云える様な者ばかりで私共の七分会でも、あちらに一組こちらに一組と残っていたがお互い言葉も交さず自分の事だけにその日を無気力に過ごしていたのである。そこへ突然の朗報だったので初めて互いに言葉を交し喜び勇んだのであった。旅費を作れと云われても目ぼしい何物もなく仕方なく、たった一枚の布団と毛布まで村人に売って私は母子三人分の旅費をつくった。宿舎中に活気が出て食糧などは気持良く分け合って先の保安隊員が出発の日を知らせに来ると歓声を上げて旅仕度をしたのであった。その時の全分会の残留人口は百名そこそこで富坪収容所最後の日本人だったのである。指定の日早く百名は富坪駅へ向った。公然と帰れると云うので皆青黒くやつれ果てた顔ながら笑みを見せて、昨日まで寝たきりだったとは思えない様にシャンとして歩いていたのであった。駅に着いた頃雨が猛然と降り出し駅舎の中にかけ込むと降る雨の中に追い出され、びしょ濡れになりながら半日も待ったが遂に汽車は来ず、駅舎の中から保安隊員が出て来て、今日は連絡の行き違いで汽車が来ないから明日来いと云うのであった。朝の景気はどこへやら皆がっかりして元の宿舎へ戻り焚火して衣類を乾かしたのであった。翌日やっと無蓋車だったが乗れた。所が少し走っては停り石炭代と云う名目でお金を取られたのである。それは幾度も幾度もくり返され遂には元山の先のケンフツロウと云う駅で全員降さ

れたのであった。

駅の裏の松林に皆入ってこれからの行動を協議した。即ち子供連れは子供連れで歩調の合った同志でと云うことで私共も三十人位のその仲間に入った。いよいよそこからは徒歩で三十八度線を突破しなければならないのである。自分の二本の足だけが頼りなのである。誰もどうもしてくれないのである。私は二人の子達に云った。弱気を出したら今度こそすてられるのよ。がんばろうねと。私達は日数がかゝっても無理をせずこの団体からはぐれない様にいこうと申し合せて発った。来る日も来る日も夜が明けて暮れるまで私達は唯気力だけで歩いたのである。恭子はすっかり元気になっていたので、いつも列の先頭を行くのに信一郎の方は慢性の腸炎が治らずだったのですぐ疲れるらしく歩き出して三日四日となるともう泣きながらやっとついて来るのであった。それをなだめたりすかしたりしてるともう一行の姿は、はるか彼方に行ってしまうので私は気が気でなく叱って見たりわざとおきざりにして一行の後を追いかけるのであったが道の曲りに来るとあの子の泣声を待っては歩く、と云う事のくり返しで毎日毎日が文字通りの苦行であった。線路添いはロスケに見つかると云って、うっかり人里にも近づけずで山を越え険しい峠を下り時には大きな河にさしかゝりで、子供連れには随分と難儀な道程であった。その人は富坪を出る時から特別衰弱のひどい人で、御主人も子供さんもすでに亡くしお鍋一つ持っていなかったので道中の食餌時には交替で食べさせていたが遂に或る峠で落伍してしまったのであった。皆立ち止って励ましたのであるがすでに物を云う元気もなく手まねで皆に行ってくれと云うしぐさをしてそれきりだったのである。暫くは誰もしゃべらず黙って歩いた。その晩も例の様に森の中に入って眠った。私は昼間亡くなった人のことなど考え出し眠れずに居た。冴えていた星が消えたと見ているとポツリポツリ降り出したちまち大降りとなったので皆飛び起きた。真暗がりの中で一列になり前の人をさぐりながら道路に出て、かすかに見えた民家の灯を目当にてんでに走った。どんなに頼んでもその家の人は起きてくれなかったのでかまわず軒下や縁の下に皆もぐり込んだ。私達も牛小屋に入って寝たのだった。翌朝家の人が起き出ない内にと早々にそこを出発したのであったが夜が明けると後から来る人達が私達をケラケラ笑ってるのでどうしたのと聞くと牛小屋組は頭も衣類もフンだらけだったのであった。道理でポカポカと暖かだったと大笑いしたのである。一度等は断崖絶壁にさしかゝり、邪魔な荷物はすてなきゃだめと呶鳴られて私は大切な食糧さえすてて前の人につゞいた。はるか崖下は岩をかむしぶきが光ってるのであった。下を見たら駄目だと又呶鳴られて恭子、私、信一郎の順で渡った。岩肌にはりついてずり足で横歩き左手に恭子右手に信一郎の指先を確かめながらジリジリとやっとの思いで渡り終えたのだが当分ひざがガクガクしふるえが止らなかったのである。又一度は腕までつかる河に差しかゝり上流を探しても下流をしらべても橋がなく男の人達が肩車で子供やリュックを対岸へ渡してくれ大人は手をつないでこゝでも横バイで河底の石のぬめりにすべりながらも助け合って渡り終えたのであった。河原で日が暮れこゝではかくれ場所がないから暴徒に襲われるかも知れないが絶対に騒がず眠った振りをしていることゝ忠告を受けて思い思いに寝た。私は布団代りの大きな布を持って居たので三人で頭からすっぽりかぶり端は体の下にしっかり敷いて一かたまりになって寝た。案の定夜中にワーッと歓声を上げて暴徒の群れが走って来た。棒でつゝいたり、たゝいたりして何かわめくのであったが誰も声を出さなかったらその内あきらめてか引き揚げて行った。来る日も来る日も歩きに歩いて陽のある間中を歩くのであったが、その日は山の麓の道を歩いていると逆の方から五六才の男の子が母ちゃん母ちゃんと泣き叫びながら走って来るのに出会った。団体にはぐれたのだろうか、それともお母さんが亡くなったのだろうかと、私達はその子を呼び止め様としても振り向きもせず手を取ってもふり切って行ってしまったのであったがあのまゝあの子はどうしたかしらと今でも時折思い出すのである。私達の団体に二才位の赤ん坊を負った若いお母さんが居た。此の方も御主人を収容所で亡くした不幸な人であったがその赤ちゃんの無心な笑顔が歩き疲れ、ともすればとげとげしくなる仲間の大人達をどんなに和らげてくれた事か。休憩になるとそのお母さんは先ずお粥を炊きおしめの洗濯とバタバタしてるのであったが、いざ出発と云う時そこいらの木の枝や草の上に広げていたおしめは乾

く間もないので赤ん坊を負った上から用意の細引きを巻きつけそれへおしめをかけて歩き出すのであった。おしめは風にヒラヒラとなびき、いつしか乾く。その姿が誠におもしろくチンドン屋さんを思わせる所から誰云うともなく、チンドン屋さんと呼ぶ様になり呼ばれる者にも又手をかす者にもユーモアたっぷりな余裕も出て来るのであった。だがうっかり保安隊の詰所に出くわすと又々すっかり検べられ又そこでめぼしい物やお金はぬかれるのであった。

その日大雨になり平身低頭して二軒の農家に分宿したがこゝでは割に穏やかで暴徒も居ず雨が止まなかったので二日泊って注文に応じてお餅など作ってくれたり若者が三人ばかり来て出発の時我々の住所を聞き日本に行きたい等と言ったりそれはこれまでにないなごやかさであったがきっと親日の村だったかも知れないと思う。そうした泣き笑いの旅も十三日目に漸く目指す三十八度線に近づいたのであった。近づくにつれ気付いた事は道端のどの家もがっちり釘付けされて居たことがわかった。そしてどちらを向いても人っ気がないのが又無気味で国境に近づいた事で緊張したのである。その日は早々と炊飯を済まし明早朝三十八度線を突破しようと申し合せ森の中に分け入った。藪蚊に悩まされ中々寝つかれずに居ると、起きろ起きろと起こされ何事と聞けば、一人の青年が近くに自分の家があるからそこへ行って寝ろと云うのであった。これまで夜も昼も自分達の団体外の人間が恐くて極度な警戒心を持っていたので私共はすぐにはその青年が信じられず皆森の中から出ずにいた所再度その青年が説得に来たのであった。二三の男の人達が交渉して結局貸賃千円だと云うことでやっと安心してその家を借りる事にしたのであった。オンドルは少し温かだった。私共は久し振り建物の中に入った喜びに先程までの恐怖はケロリ忘れて座り込んだのであった。部屋が三ッ位の小さい家だったので、足も延ばされず座ったまゝでぎっしり、くっついて皆すぐ眠ってしまった。とたちまち、起きろ起きろと誰かの低いが鋭い声に起こされ私は反射的に飛び起きた。恭子もすぐ目を覚まし母ちゃんと顔を見合せたのであったが、信一郎の方は中々覚めない。もう先頭は歩き出していたのである。私は信一郎の顔をピチャピチャ叩いても起きないので気が気でなく引きずりながら一行を追った。外は未だ真っ暗だった。誰も一言もしゃべらない。皆の足音だけが松林の砂地の道をスタスタスタスタとひびくのみであった。一刻も早く皆無事に国境を突破しなければならない。誰もが其の思いに必死だったのである。それまでの情報では三十八度線は十メートル巾位の川を境に北側にソ連軍南側に米軍の歩哨が立って居ると云うことであって、昨夜の宿の青年の話に依るとあの家から三十分も歩けばその国境の川に達すると云う事であったが三十分どころか一時間もいや二時間も歩いたと思われるのに目指す川は見えず道を違えたのではないかとか騙されたのではないかとか云い出す人も出て、こゝらでぐづぐづしていてソ連の歩哨線に引っかかったらもうおしまいだともう其の時の気持は何とも云い様もないのであった。夜はすっかり明けきって陽がさし出しても川に出合えず皆の目は血走り歩くと云うよりかけていくのであった。と向うから大きなバカチを頭にのせたおかみさんが来た。私達はほっとして小さい声でロスケ、イッッと聞くとオブソとすぐ答えた。そして川への道を聞くと今度は手まねで此の道を行けと教えてくれた。そのおかみさんはすごく固い表情だったのが印象的だったが、お互い恐かったのだと思う。少し行くと年とった男の人に出会った。私達は此の老人にも先と同じ様に川への道を聞いた。するとやはり此の道をずーと行けと黙って手まねで教えてくれた。これで皆安心してそれこそ走り出したのであった。何者かに後から引っ張られる様で気ばかりあせり足が思うように前に進まず、私は何を履いてたのか忘れてしまったがやたらと足が重かったので走りながら履物をぬぎすてて、はだしになって信一郎を引っ張って行ったのであった。するとはるか先方から水の音が聞こえるぞーと先頭を行く人の叫び声に皆もう無我夢中。見えた見えた木立の間から川の光りが。橋はどこだーと口口に叫びながら、すると今度は橋があったぞーここだ、ここだと大声で怒鳴る男の人達の声に、ワーッと橋に向って雪崩込んだのであった。母ちゃん早く早くと恭子は私の手を引っ張るし私は信一郎をかゝえて人々の群れにそれは一固りになって橋の上にもみ出された様なものであった。その橋と云うのは簡単な板橋で巾一メートル半位の粗末なもので八番線で板と板をつないだものだった。渡りきって対

岸へ着くと私はヘタヘと腰が立たなくなりその場へうづくまってしまったのである。何しろ此の国境にソ連兵の歩哨が立ってると聞かされたので、何時追っかけられるか、何時撃たれるかと云う恐怖の連続だったので橋を渡りきった時は、物も云えず息も切れるかと思うばかりであった。恭子が母ちゃん良かったねと抱きついて来て他の人達も皆立ち上って泣きながら万才を叫んだのであった。十三日間歩きに歩き野宿をして来たので着てる物も破れ汚れ誰の顔も陽焼けと垢で男だか女だかわからない位で痩せ衰えて目ばかりギョロギョロしていたのであった。足は腫れ上りあちこち皮が破れて血が吹きその割れ目に砂がめり込んでその痛いことは骨にこたえるのであった。だが命がけのこの三十八度線を越えたと云う喜びの方が大きくて暫くは皆手を取り合って泣いたのであった。五月も終りの初夏の陽はサンサンと輝き川の水は豊かに流れていた。

私達はその川の中へ入って心ゆくまで長途の旅の垢を落したのである。泣きながらよくもあの難路をついて来たものと私は子供達の体を洗ってやりながら涙が流れ出て止まらないのであった。

明るい話声は川岸いっぱいに果てもなくつゞいて、やがて立ち上った皆の顔はもうにこにこと足どりも軽く京城への路をたどったのであった。南鮮側に入ってからは現地の人の表情も明るく、折しも田植えの頃とてあちこちの、田んぼから私達の行列にオーイ田植えして行かんかーとかサヨナラーとか云って手を振るのであった。私達は北と南と余りにも明暗の違いに驚いたのである。暫く行くと半円形の建物が見えた。誰かが米軍のキャンプだと云った。こゝで一寸緊張したが別に危害を加えられることなく、通行証明書をくれたり、一人一人に全身白い粉をふりかけて消毒されたのであった。

その米軍のキビキビした行動に皆安心したのであった。そこからは道巾も広く家並みも続く小さな町に出た。もう京城の市街は眼下に見えた。お金を出せばトラックに乗れると云う事で私は確か百円だかを払って乗った。そこでは日本人世話会と書いた腕章を巻いた人に案内されて世話会事務所に連れて行かれそこで一枚ずつの古着とカンパンを貰い乗船までの宿舎へ案内されたのであった。

そこは元教会だった建物で、私達が案内された時はすでに先住者でいっぱいであった。けれどもうこゝまで来れば、せまい位何でもなく、電灯も灯っているし畳もある。然も宿舎の雰囲気は日本へ帰れる希望に満ちてすごく明るいのであった。これまでのあの暗黒と恐怖の世界とはまるきり違って街は煌々と明るく電車も走っていた。そこはまるで別世界だったのである。街には、お米もお菓子も肉も魚も何でもあるのですよ、との先住者の話に私達は驚きと羨望に生唾を飲んだのであった。

すると此の話をそばで聞いていた子供達から、母ちゃんあの事と謎めいた事を云われて、あの事ってなぁにと二人に聞くと二人は顔見合せくすくす笑いながら又もあの事よと云う。私はやっと思い出した。それは今日まで何かと云うとこの二人に云った言葉で、それは京城へ着いたら、何でも好きな物をお腹いっぱい食べさせてあげると云ったことなのであった。その時この二人はきまって私おすし僕生菓子、それからエートエートとおいしい物の話をする時の此の二人の嬉しそうな顔とその約束のあの事を私は思い出し、瞬間私はこの子等の為今自分の持ってるお金を皆使ってしまっても良いと云う気になった。終戦の九月に家を追われて以来凍土の収容所にムシロ一枚で越冬し徒歩で国境を越える為十三日も草の中にわづかの栗を入れて炊いたものを食べて大人について歩き通して来たこの子等に私はどんなにしてもし尽せないものを感じたのである。買って上げるよきっと、明日ねと重ねて約束をした。寝ながら私は懐に手を入れなけなしのお金を指先で数えた。ヤミ値で高いと云っても今この子達の長い夢を叶えてやる事は出来るであろう。私は翌日の夕刻部屋の人達七八人と京城の街に出た。電車通りは余りにも明る過ぎ自分達のみすぼらしい姿に気が引けて歩けず私達は裏通りを歩いた。裏通りと云っても京城の街である。商店は軒を連ねて米も野菜も山の様に積み上げてあるのであった。それこそ何でもあった。私は先ずお米を買い、それから子供達の注文の品を探した。あった。のり巻き、大福、何でもあった。私はそれらを買いしっかりかゝえて宿舎へ帰った。二人は窓から首を出して私を待っていた。初めて人間らしい食物にありついて二人はもうにこにこし通しなのであった。それから三四日して仁川から乗船出来ると云う報せも連絡員の方から聞きこゝではほんとうに安心して休養がと

れたのであった。こゝでの一日一日が大人にも子供達にも体力回復になった様で子供達も明るい表情が戻り元気に走り廻るのであった。愈々私達の乗船の番が来た。世話会の方のてきぱきした誘導で途中何の混乱もなく仁川に出たのである。港には沢山の船が停泊していた。こゝでも長い間待たされてやっと乗船が始まりうねうねと幾曲りも続く人の列が次第に巨船に呑み込まれていった。

二度とこの地を訪れる事はあるまいにあの富坪に眠る愛する夫や子達の名を心に呼びつゝタラップをふんだ。船は貨物船だった。船室は広くムシロが敷きつめてあって私はすぐ横になった。折角祖国を目前にしながら船の中で亡くなった方があって水葬され悲しい汽笛を鳴らしつゞけて私達の乗った船は一路博多へ向ったのであった。

〃歳　　月〃

原　田　広　吉

うらゝかな小春日和の12月の或る日、南の空から飛んで来た〃呑龍〃1機。おかしな飛び方だなと思いながら畑の草むしりをしていた私は、その飛行機を見上げた。何か煙のような白いものを吐き出しながら北の方へ、それも段々と高度を落しながらユックリ飛んで行ったと思ったら、ガクンと揺れて益々下降して行きいきなり地平の影へ突っ込んだ。

それは、吾が国が米英に宣戦の布告をした年の前年だったかその前だったか、（このところチョット記憶がハッキリしない）が、私は飛行機の落ちた方角へいきなりかけ出して行った。

雑木林を薙ぎ倒して軟着陸したような恰好で機首は地面に突っ込んでいた。まわりの畑から集まった大勢の人が、怪我人を運び出していたが、まだ虫の息の人もいた。後で聞いたら7人全員助からなかったそうだ。私は何かしら不吉な予感にかられたことを覚えている。

＊　＊　＊

私は戦争も可成り旗色が悪くなった19年に、1銭5厘の葉書で駆り出された口の兵隊で、原隊の佐世保に入りました。私は主計科ですから、所謂〃佐鎮8分隊〃知った顔は誰も居ませんでした。（主計はどこの鎮守府でも8分隊です）

まぁ、知った顔と言えば、勝沼の三枝欣二郎先生に会った時は、ウレシカッタ。外の奴に聞いたら佐世保海軍病院の副院長閣下とのこと。脚気にかかって脚が膨らんで長靴も履けなくなって、陸へ上げられ病院へ押し込まれた時でした。（海軍病院の副院長と云えば、まるで神様みたいな存在でした……。）

おかげで可成りよくなって、病院から唐津の保養分隊へ派遣と云うことで送って貰い終戦まで、いともノンビリと暮させて貰いました。尤もノンビリとは言っても矢張り軍隊。相当に辛いこと、苦しいこともありました。

敵さんの定期便（艦載機の編隊空襲）はチョクチョク来ていたが、20年の3月頃からは段々激しくなり、物資（食糧品）の買出しはこれ又大変。何しろ娑婆は耐乏生活のさ中ですから……。危なく爆撃でやられ相になったり、結構いろいろありました。

何しろ主計は、部隊員450名のメシを作らねばなりません。少ない物資を何とか掻き集めに、農協さん、魚市場等、あの手この手を使って調達する苦労も大変でした。何しろ海軍では一日何カロリーと決められていましたから……。

20年の3月からはグラマンの定期便が毎日来るようになって、朝の烹炊作業を始めるとキマってやって来るんです。警報が出ると煙を上げることができません。吾々の部隊は、音に名高い唐津の虹の松原の真中で、燃料はその松の枯枝を集めて野戦烹炊をやっていましたから大あわてに炭と替えるんです。下手をするとゴッチリ飯になるのです。終いには馴れて来て始めから木炭を混ぜてやり余り困らなくなりましたが……。

敵さんの方は大体5梯団か精々10梯団位でしたが、一番多い時は30梯団と云う大部隊にやられたこともありました。その間に例のB 25が混じって来ては1粁ボンを落して行くのです。肝が冷えます。

＊　＊　＊

昔、何かの本で読んだ、ある有名な歌人が見たと云う夢の話で、とてつもなく大きな女のものの夢を見て、その余りの大きさに、荘厳さえ感じてその中へ入って行き段々奥の方へ行ったら、大きな男のものが頑張っていて、驚いた拍子に眼が覚めたと云う話ですが、〃俺もそんな夢でも見ない

かなァ〃なんて考えていた。まことに不心得な兵隊でした。

それでも出て来た多摩の風物は、生きて再び見ることはあるまいと思っていたことは確かで、覚悟はできていたのか、女房子供のいる風景なぞ一度も見ませんでした。終戦の詔勅を聞いた時は、矢っ張り涙が出たことを覚えています。

その後が主計は大変なんです。それこそこれも戦争。離現役手当の支出計算、帰還証明、旅費を一人一人の郷里を調べて計算、支給品の調達と目の回る忙しさ。やっと暇になってまだ帰れません軍需部から預かっている保管物資があるのです。少し離れた所に〃陸〃さんの油貯蔵庫がありましたが、そこへ油類を盗みに娑婆の人達が牛車を引っ張って、夜ともなると絡繹とやって来るのです。

此方も保管物資を盗まれては大変。それで沖縄出身で帰る先の決まらない兵隊が残っていましたから、これに着剣させて毎晩歩哨に立たせる始末。

その内に軍需部から命令がヤッと出て、全部のものを地方自治体に放出と云うことになり、受領証を貰ったり、軍需部へ届けたり、この時の書類や、家族から来た手紙（可成り黒い線で消されていたが）などは、今にして思えば保存しておけば好かったなァと悔やまれます。善きにつけ悪いにつけ記念でしたから……。

こんなこともありました。終戦の年の9月に入った或る日、日の丸の付いた飛行機が唐津湾の向うから飛んで来たが、岸辺間近まで来たら、いきなり海中に真っ逆様に突っ込んだんです。みなで救助に伝馬船で行きましたが、機体も乗員も滅茶々々で海の底だし手が付けられません。燃料切れか、覚悟の上で日本の山や海岸を見て突っ込んだのか、死んで終えば全然分りません。同じ兵隊として、〃折角こゝまで帰って来て、何で……〃と思うと、痛ましくて何日か気が重いことでした。

＊　＊　＊

私は一番最後に部隊を離れました。海軍の兵隊は下宿を持っています。私も唐津市内で、金末さんという元大審院の判事をしておられた方の未亡人の家をお借りしていましたので、そちらへ暇乞いをしたり何日か唐津に居ました。同僚は、みんな〃東京は大分ひどいと云うことだし家族も生きているかどうか分らん、貴様は元々九州生れだから此方で何かやれよ〃と言って呉れましたが、とに角一度帰って、生死を確かめてからのことだと思って、一路東京へ。

主計の役得で残務整理の時、銀蠅しておいた士官用の乾麺麭1箱（15粁入り）を担いで汽車に乗りました。

ところがドッコイ、車中の殆どの人が食物を持っていません。腹が減っても私一人で喰う訳にはゆきません。おまけに乗った汽車は、行き当りバッタリで、結局東京まで、7日かゝってやっと着いてその間乾パンの殆どはまわりの人々へ上げて終って、家へ帰って子供達にお土産だと分けてやったのは唯の7個でした。

家へ帰ってからの生活は、ご存知の通りの窮乏の生活で私は多少の畑がありましたからいくらかは楽でしたが同じようなもので、その後の生活の方が私には却って応えました。戦争ボケと云うか平凡な人間が生き抜くには相当に辛い世の中で、戦前、戦後の世相に対して警世の句を吐くなど、吾々凡庸の徒のすることでもないし、またできもしません。辛い思いをしたのは生き残った日本人の殆どがそうだと思います。只、死んで行った私達の仲間のことを思うと済まなくもあり、今斯うして、生き残っていることも、とに角私は兵隊としても誠に幸運であったとしみじみ思います。が、考えて見るとこれも余計ものゝような気がしないでもありません。それでも、生き残れたことは感謝です（日頃の心掛の悪い割にはね）有り難いと思います。

それも、これも、いま　こうして、このような心持で当時のことを振り返れるのも、矢張り歳月の重みだと思います。その当時この体験を書くとしたら恐らくこんな文章ではなかったと思います。矢っ張り歳月ですね。それとも、マッカーサーの施策の影響かな　いや矢張り歳月ですね〃